

## 2021年11月野菜概況

北日本でかなりの気温高、降水量は北日本・東日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。

11月は温暖かつ適度な降雨もあり、多くの品目で生育は順調に進んだ。本年は大きな台風被害もなかったことで、キャベツや大根、人参、白菜、ほうれん草など関東産中心の品目は潤沢な入荷により安値基調となった。反面、トマトは熊本産が昼夜の温度差から裂果が多く数量伸び悩み高値推移。馬鈴薯・玉ねぎは北海道産が不作のため高値が続いた。11月の野菜総入荷量は123,074t(前年比99%)で平年並み、価格215円(103%)は平年より1割以上安い。金額は26,444百万円(102%)で平年を1割以上、下回った。

だいこんは青森産が終盤で減少する中、千葉産が増加傾向に。需要ありながらも全体量潤沢で安値推移。総入荷量は平年並み、価格55円(93%)は平年の4割近く安。にんじんは北海道産が終盤で減少する中で千葉・埼玉産が出始め増量。全体量十分で、月を通して荷動きは鈍かった。総入荷量は平年より1割多く、価格103円(76%)は平年の3割安。

はくさいは長野産が終盤となり減少する中で茨城産が順調に入荷。気温低下して鍋物需要ありながらも、出回り量はそれ以上に多く安値推移。総入荷量は平年並み、価格42円(124%)は平年の4割安。キャベツは千葉・茨城・神奈川・愛知産が順調に入荷。台風被害なく作柄良好であった。月を通して全体量多く荷動きは鈍かった。総入荷量は平年よりやや多く、価格68円(110%)は平年の3割安。ほうれんそうは前月下旬に気温低下で減少するも11月は生育順調となり増量、出荷の山場となった。茨城産を中心に小松菜等からの転作があり、全体量の多さから安値推移。総入荷量は平年より3割以上多く、価格391円(95%)は平年の3割安。ねぎは北海道・青森産を中心に順調入荷、茨城産も増量傾向となり全体量は潤沢。気温低下で鍋物需要もあったが出回り量の多さから安値推移。総入荷量は平年並み、価格228円(75%)は平年の3割安。レタスは茨城産を中心に兵庫・長崎・静岡産の出回りで各地とも生育順調。気温低下でサラダ需要は減退、全体量も多く安値推移。総入荷量は平年よりやや多く、価格126円(120%)は平年の3割以上安。

きゅうりは前月下旬に気温低下で減少して高値となったが、11月上旬には天候良く数量回復。高値反動もあり相場は下落傾向に。関東産は盛期過ぎ数量落ち着くも、宮崎・高知産が増量して十分な出回りがあり、荷動き緩慢にて推移。総入荷量は平年より1割近く多く、価格297円(94%)は平年の2割以上安。なす類は高知産が中心となり順調な入荷。上中旬は増量傾向だったが下旬は気温低下、樹勢が落ち着き全体量は減少した。荷動きは月を通して鈍かった。総入荷量は平年より1割近く多く、価格403円(97%)は平年より1割以上安。トマトは千葉・愛知産中心の出回り。熊本産は黄化葉巻病の発生や裂果の多さから数量は伸び悩んだ。前月下旬から全体量の少なさで相場が上昇しており、中旬には高値反動で荷動き鈍る場面はあるも価格は堅調に推移。総入荷量は平年より若干少なく、価格512円(111%)は平年並み。ピーマンは茨城・高知・宮崎産が順調に入荷。中旬からは茨城産の秋作が終盤で減少するも全体量は依然多く、月を通して荷動きは鈍かった。総入荷量は平年より1割多く、価格356円(83%)は平年より2割以上安。

ばれいしょ類は北海道産が夏期の高温・干ばつにより小玉傾向。入荷量は少ないが高値続きで引合いは落ち着いていた。単価の低い小玉は引合いがあった。下旬には長崎産の入荷が始まるも干ばつの影響で小玉傾向。総入荷量は平年より1割以上少なく、価格195円(142%)は平年より6割近く高い。たまねぎは北海道産が夏期の高温・干ばつにより小玉傾向。入荷量少なく不足感があった。高値のため単価の低い小玉に需要が寄る向きもあった。総入荷量は平年より2割近く少なく、価格169円(225%)は平年の倍となる水準。

【輸入野菜】ばれいしょは輸入時期が国産の端境となる2～7月に限定されていたが、前年から通年輸入が解禁されたことと、本年は国産が不作なことからアメリカ産の輸入量が前年比大幅増。たまねぎは国産が不作なことから、中国産を中心に前年比で大幅増。一方、かぼちゃはコロナ禍で外食需要が減退する中、国産の価格が前年を下回ったことからニューカレドニアやメキシコ産を中心に輸入量は前年比大幅減。にんじんも同要因により中国産を中心に輸入量は前年比大幅減。